令和３年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

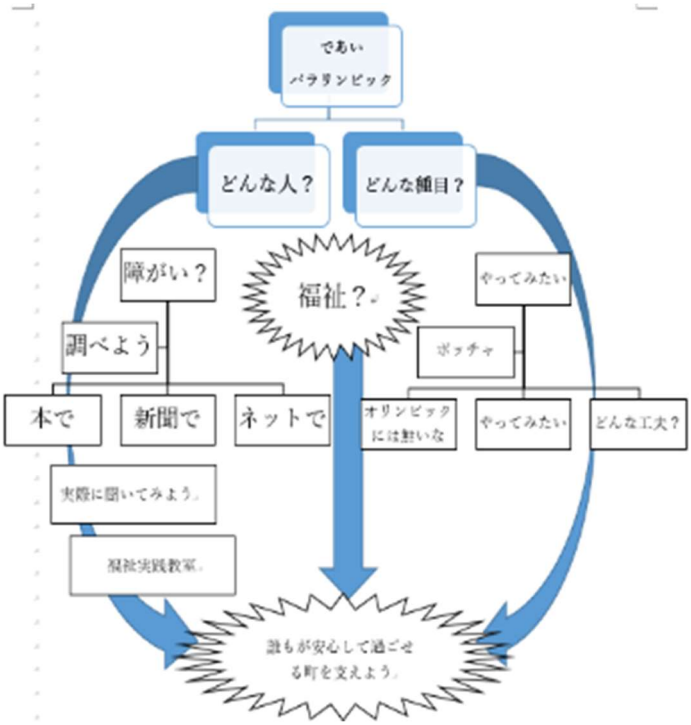
事業実施報告書

Ⅰ　スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
Ⅱ　マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
Ⅲ　スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
Ⅳ　日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
Ⅴ　スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

学校名【　愛西市立永和小学校　】

１ 実践テーマ	【　Ⅰ・Ⅲ　】
２ 実施対象者	第４学年（２クラス）　６９名
３ 展開の形式	⑴　学校における活動 ①　教科名（　総合的な学習の時間　） ②　行事名（　福祉実践教室　） ③　その他（　　） ⑵　地域における活動 ①　イベント名（　　） ②　その他　（　　）
４ 目　標 （ねらい）	・オリンピック、パラリンピックの意義について理解を深め、目の前の課題に粘り強く対処し、よりよく課題を解決しようとすることができる児童を育てる。 ・障がいの有無に関係なく、一人一人が生き生きと生活し、力強く生き抜くことができる共生社会づくりにつとめることができる児童を育てる。
５ 取組内容	**【事前学習】** **⑴　オリンピック、パラリンピックについて調べる。** オリンピック、パラリンピックが開催されることが決まったことをうけ、オリンピックやパラリンピックについて個人調べを行った。新聞を読み、関連記事をスクラップしたり、種目について調べたりする姿が見られた。オリンピック、パラリンピックについて知り、興味や関心をもつことができた。 **⑵　ボッチャについて調べる。** パラリンピックにしかない種目である『ボッチャ』に着目した児童の発言から、ボッチャについて調べ学習を行うこととした（資料１）。NHK『アニパラ』を視聴したり、個人調べでボッチャについて調べた児童のまとめを読んだりした。 資料１　ワークシート **【体験活動】** 日本福祉大学　安藤佳代子先生 ロンドンパラリンピック　ボッチャ日本代表　加藤啓太選手

	⑴　**ボッチャ体験を行う。** 　日本福祉大学の安藤先生の指導の下、ボッチャの体験を行った。（資料２）　ふりかえりには、「手が不自由な人も、足が不自由な人もできる、みんなが楽しいスポーツだということが分かりました。」と記述されており、実際に体験することで、ボッチャの楽しさに魅了されていく子どもたちの姿が見られた。 資料２　ボッチャ体験の様子 ⑵　**加藤啓太選手のお話を聞く。** 　ロンドンパラリンピック　ボッチャ日本代表の加藤選手に講話をいただいた。一緒にボッチャの試合もさせていただき、加藤選手の巧みなプレーを間近で観戦することができた。（資料３）また、夢をもち前向きに行動することの大切さについて話をしてくださった。２分の１成人式をむかえる４年生の子どもたちにとって、自分の将来の夢について考える機会となった。 資料３　加藤選手と試合をする児童 **【事後指導】** ⑴　**福祉実践教室を行う。（聴覚、視覚、高齢者福祉について）** ⑵　**共生社会に向けて、自分たちができることについて考え、発信する。** 　誰もが楽しく、参加することができるオリジナルのスポーツを考える活動を行った。グループごとにアイデアを出し合い、ルールや道具を自作し、年齢や障害の有無にかかわらず、誰もが楽しむことができる競技を考えることができた（資料４）。 資料４　考えた競技を行う児童
６ 主な成果	・ボッチャを体験した後の児童のふりかえりには、「ボッチャを体験して、みんなが楽しく平等にやることができるんだと思いました。」「障害があってもなくてもできるすごい競技だと思いました。」など、ボッチャの魅力を実感している様子がみられた。また、加藤啓太選手の思いに触れたことで、「失敗してもあきらめないことが大事だと分かった。これから失敗しても、何度だって挑戦する。」「挑戦するという勇気をわたしももちたい。」という振り返りがみられ、自分自身の生き方を考える機会にもなった。 ・オリジナルのスポーツを考える活動では、ボッチャ体験を生かし、「誰もが楽しむことができる競技」を意識してアイデアを出し合う姿が見られた。他者のことを考えながらルールや道具を作ることができた。

７ 実践において工夫した点（事業の特色）	・思考の深まりをねらい、福祉実践教室とのつながりを意識して単元を構想した。（資料　単元構想図） ・ボッチャを身近に感じさせるために、実際の選手との交流する時間を設けた。 （単元構想図） 
８ 主な課題等	・４年生だけの実践になってしまったため、貴重な体験を学校全体で共有できるようにしたかった。 ・講師が安心して校内を移動できるような環境づくりが難しかった。スロープなど、バリアフリー化を進めていきたい。
９ 来年度以降の実施予定	・福祉実践教室として、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由の方たちについて学ぶ機会を今後も継続して行っていく。